



奈良団扇職人

日本の夏を、伝統の技で涼ませる。

池田 匡志氏



Tadashi Ikeda

1990年奈良県生まれ。現在奈良市内で唯一、奈良団扇の製造販売を手掛ける創業約160年の老舗「池田含香堂」の6代目。高校時代は野球、大学ではハンド活動に熱中し、卒業後に職人の道に入る。

奈良団扇 (ならうちわ)

平安時代初期、春日大社の神官が中国伝来の「翳」をまねて儀式用につくったのが始まり。竹と和紙からなり、その特徴は透かし彫りと骨の多さとなり。非常に軽く、伝統ある工芸品ながら使い勝手の良さも定評がある。



春日大社の神官が儀式に用いた道具を起源として、およそ二百年前に誕生した奈良団扇。安土桃山時代に透かし彫りが施されるようになり、江戸時代には暑さしのぐ道具として庶民にも広まるが、技術伝承の難しさ故、次第に透かし彫りは施されなくなった。その技を明治時代によみがえらせたのが、

奈良市内に約百六十年続く「池田含香堂」の二代目、池田栄三郎氏。そして今、六代目となる池田匡志さんが伝統の継承に励む。

奈良団扇の魅力は？

池田「色鮮やかな扇面に繊細な透かし彫りが映えて美しく、使いやすいことですね」

さまざまな色に染めた和紙に、椿油をつけた小刀を突き刺す。そして墨で写した型に沿って、刃先を滑らせるように運ぶ。ここで重要なのは、手の動きを止めないこと。一息に彫ることで曲線が滑らかになり、細部まできれいに仕上がるという。

模様によつては、団扇のほぼ全面に透かし彫りが施されるにも関わらず、奈良団扇はしっかりと風を起こす。その理由は一般的な団扇の二倍以上となる七十本もの竹製の骨にある。骨数が多く、細いので団扇がよりしなやかにしなり、それが透かし彫りの有無に関係なく風を効率的に生み出すのだ。

奈良団扇は気候に合わせて、二年がかりでつくられる。空気が乾いた秋から冬にかけて骨づくりと和紙染めを行い、春から夏にかけて完成させることで暑い季節に涼風をもたらす。

今後の抱負は？

池田「日本の夏には奈良団扇がある。いつか、世界中の人々からもそう言ってもらえるような団扇をつくりたいですね」

一度は途絶えた技を復興させ、日本が誇る伝統を守り伝えてきた先達の志を受け継ぎ、若き六代目は決して歩みを止めず、明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2017年4月取材。掲載内容は取材当時のものです。

映像ドキュメンタリー
「明日への扉」を
ぜひご覧ください。

WebやTVなどで
お楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

検索

SNS配信

Facebook <https://www.facebook.com/AthomeTobira>
Twitter <https://twitter.com/AthomeTobira>

TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)
冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



Discovery CHANNEL

最新号のご案内

好評公開中

No.096

刷毛引き本染め職人
吉田 健太氏
(北海道)